「日々の理科」（第 1840 号）　2019,-7,23

「学校のコウモリ（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

このコウモリの赤ちゃんは、ピンセットにしがみついて、決して離そうとしなかった。コウモリの子どもは、親にしがみついたまま空を飛ぶこともあり、「しがみつく」ということは、生きるか死ぬかの重要な能力なのだろう。

コウモリは、もちろん哺乳動物である。世界中に約千種類の記載があり、哺乳動物（網）の約４分の１を占める、大家族である。

富士山の溶岩洞窟（風穴や氷穴）でよく見られるのは、キクガシラコウモリ *Rhinolophus ferrumequinum* が多い。東京のような都会地では、キクガシラコウモリは稀で、アブラコウモリ *Pipistrellus abramus* が多い。アブラコウモリは、人家に営巣する唯一のコウモリで、「イエコウモリ」ともいう。東京でコウモリを見かけたら、ほぼアブラコウモリに間違いない。倉庫や高架下などに、集団で営巣することもあるようだ。

この日に捕獲した種も、アブラコウモリの幼体だった。顔はやはり「けもの」の様相を持っている。明るいところが苦手なのか、まぶたはめったに開かない。

前肢の先端には、するどい爪を持っている。コウモリは昼間に休む時、後肢の爪でぶらさがって、頭を下にして休む。しかし、排せつの時や、樹上をはい回る時は、前肢も使うのだ。

とりあえず、小さなシャーレに入れてみた。平らな「地面」は苦手なようで、自力ではほとんど動けない。やはりコウモリは、「何かにしがみつく」「飛ぶ」とこが、一番得意で、体の構造もそれに適したようにできているようだ。